

カマド

北壁中央部に構築されていた。

煙道部は、壁外に舟先状に突出した緩やかな掘り込みをなす。

袖部を構築していた面取りした軽石と橙色粘土が一部残存していたが、カマド手前の床面に軽石の集中分布がみられ、この在り方は、カマド破壊後の廃棄状態を示していると考えられる。

火床面の掘り方には、袖石が埋め込まれていたと考えられ小ピットと円形の掘り込みがあり、褐色土で埋め戻されていた。

覆土には、構築材の橙色粘土ブロックの堆積層、暗褐色土(①層)、炭化物片を含む暗褐色土(②層)があった。

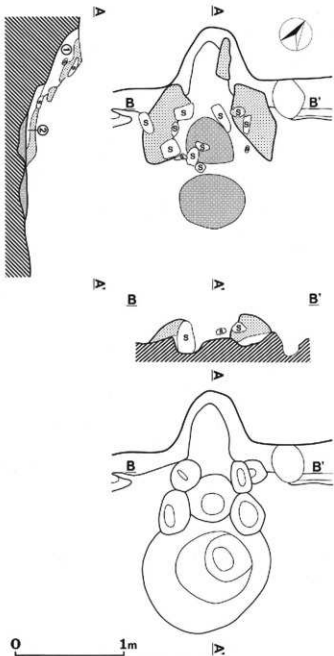
遺物

検出された主要遺物は、須恵器蓋・坏、土器器坏・甕、刀子・鉄鏝、砥石である。

1・2はつまみ部が宝珠形を呈する須恵器蓋で、Ⅱ区2層から検出されている。

3～9は須恵器坏である。3～7・9は回転糸切りによる底部をなす。3～7は未調整であり、8は手持ちヘラケズリ、9は外周に手持ちヘラケズリが施されている。8はカマド右脇の床面、3はP1右脇の床面から検出され、6・7はカマド内、4・9はⅠ区2層、5はⅡ区1・2層から出土している。10は須恵器高台付坏の底部で、回転糸切りによる底部をなし、Ⅰ区2層から出土したものである。

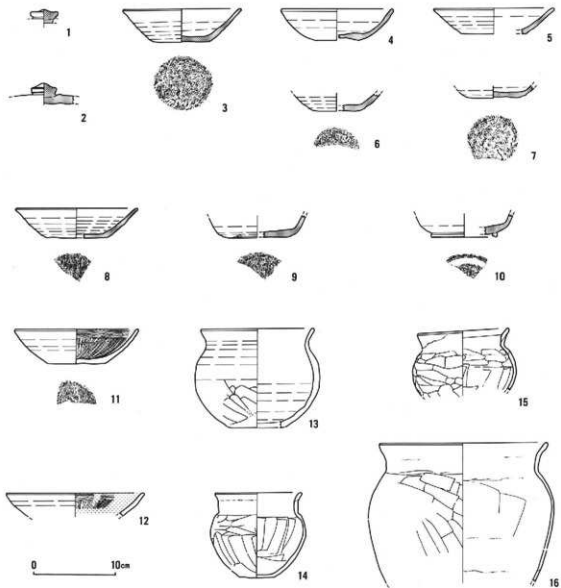
11・12はロクロ成形の土器器坏で、内面黒色処理が施されている。11はカマド内、12はP1北脇の床面から検出されている。



第174図 H45号住居址カマド実測図(1:30)



写真166
H45号住居址
カマド

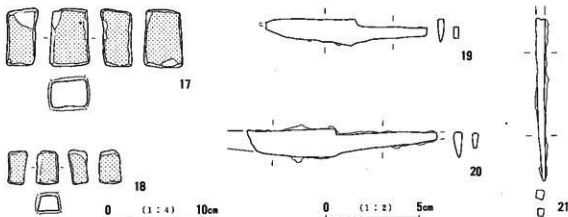


第175図 H45号住居址出土土器（1：4）

表68 H45号住居址出土土器観察表

群別 番号	器名	器形	数量	残存	成形	調	製	色調	出土位置	備考
1	深鉢器	楕	— (3.3) (1.5)	つまみ 定形	ワタ	一つまみ貼付		内面：10GY4/1 外面：10GY4/1 断面：7.5GY6/1	Ⅱ区2層	
2	深鉢器	楕	— 3.0 (2.6)	つまみ 3/4	ワタ	一つまみ貼付		内面：7.5Y4/1 外面：7.5Y4/1 断面：5Y4/1	Ⅱ区2層	
3	深鉢器	杯	(14.3) 7.0 4.0	口縁3/4 底面完整	ワタ	一底面川板糸切り		内面：7.5Y5/1 外面：7.5Y5/1 断面：2.5Y6/3	Ⅰ区北面	外底残部に へり記号
4	深鉢器	杯	(13.6) (5.3) 3.8	口縁1/5 底面1/3	ワタ	一底面川板糸切り		内面：7.5Y6/1 外面：7.5Y6/1 断面：7.5Y6/1	Ⅰ区2層	

5	須恵器	杯	(14.8) (7.9) 3.1	口径1/3 底部1/5	コタロ	→底部回転糸切り	内面: 10YR6/2 外面: 10YR6/4 断面: 5Y6/1	I区1・2層	
6	須恵器	杯	— (5.8) (2.2)	底部1/2	コタロ	→底部回転糸切り	内面: 5Y5/2 外面: 2.5Y5/2 断面: 2.5Y6/1	コナド	外面底部に ヘラ記号
7	須恵器	杯	— 6.8 (1.5)	底部2/3	コタロ	→底部回転糸切り	内面: 5YR6/4 外面: 5YR5/4 断面: 5YR6/4	コナド	外面底部に ヘラ記号
8	須恵器	杯	(14.8) (7.4) 3.6	口径1/5 底部1/4	コタロ	→底部切り離し(切り離し方不明) 外面: 底部手持ちヘラケズリ	内面: 10Y5/1 外面: 7.5Y5/1 断面: 7.5Y5/1	I区床面	火葬あり
9	須恵器	杯	— (8.2) 2.7	底部1/3	コタロ	→底部回転糸切り 外面: 底部外周手持ちヘラケズリ	内面: 2.5GY5/1 外面: 2.5GY5/1 断面: 2.5GR5/1	I区2層	火葬あり
10	須恵器	杯	— (8.0) (2.9)	底部1/5	コタロ	→底部回転糸切り→高台貼付	内面: 2.5GY5/1 外面: 8Y5/1 断面: 7.5YR5/2	I区2層	
11	土師器	杯	(15.0) (7.0) 4.2	口径1/5 底部1/4	コタロ	→底部切り離し(切り離し方不明) 内面: ヘラキガキ→黒色処理 外面: 底部手持ちヘラケズリ	内面: 7.5YR6/4 外面: 5YR7/4 断面: 7.5YR7/4	コナド	二次焼成を 受けている
12	土師器	杯	(18.7) (2.9)	口径1/5	コタロ	内面: ヘラキガキ→黒色処理	外面: 10YR3/1 断面: 10YR6/2	I区床面	
13	土師器	甕	(13.7) (6.7) 12.1	口径1/3 底部一部	コタロ	外面: 胴部下手持ちヘラケズリ	内面: 7.5YR7/4 外面: 7.5YR5/4 断面: 7.5YR7/4	I区2層	
14	土師器	甕	(10.5) (4.2) 10.4	口径1/5 底部1/3	非コタロ	内面: 口径コナダ→胴部ヘラナダ 外面: 胴部および底部ヘラケズリ→口径コナダ	内面: 5YR5/4 外面: 5YR3/4 断面: 7.5YR6/4	I区2層	
15	土師器	甕	11.0 — (7.7)	口径3/4	非コタロ	内面: 口径コナダ→胴部ヘラナダ 外面: 口径コナダ→胴部ヘラケズリ	内面: 5YR5/4 外面: 5YR3/4 断面: 10YR6/3	I区2層	
16	土師器	甕	20.4 — (17.1)	口径2/3	非コタロ	内面: 口径コナダ→胴部ヘラナダ 外面: 口径コナダ→胴部ヘラケズリ	内面: 5YR4/3 外面: 7.5YR6/4 断面: 5YR6/6	I・II区2層	



第176図 H45号住居址出土石器・鉄器

表69 H45号住居址出土石器・鉄器観察表

持出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土区画	備考
17	磁石	漢紋岩	6.2	4.1	3.4	110	I区1層	
18	磁石	漢紋岩	3.6	2.9	2.1	20	I区1層	
19	刀子	鉄	(8.5)	1.4	0.4	(9.0)	I区1層	
20	刀子	鉄	(10)	1.5	0.4	(13.6)	I区1層	
21	鉄鏝	鉄	(8.7)	0.5	0.5	(6.2)	I区1層	

13はロクロ成形による土師器小形甕で、Ⅱ区2層から出土している。

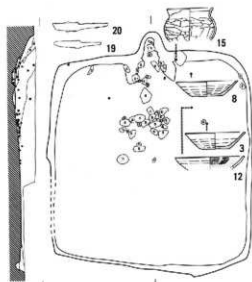
14・15は土師器小形甕で、15はカマド右脇の2層、14はⅡ区2層から検出されている。

16は「コ」の字状口縁を呈する土師器長胴甕で、Ⅰ・Ⅱ区2層に破片が分布していたものである。

17・18は四面の使用面をもつ小形の砥石であり、共にⅡ区1層出土の遺物である。

19・20は刀子、21は鉄鎌の基部と考えられるもので、これらはⅡ区1層から検出された遺物である。

本住居址から検出された土器群は、須恵器杯・土師器杯・土師器長胴甕の特徴と組成から、平安時代前半、九世紀前半の土器様相と考えられる。



第177図 H45号住居址遺物分布図

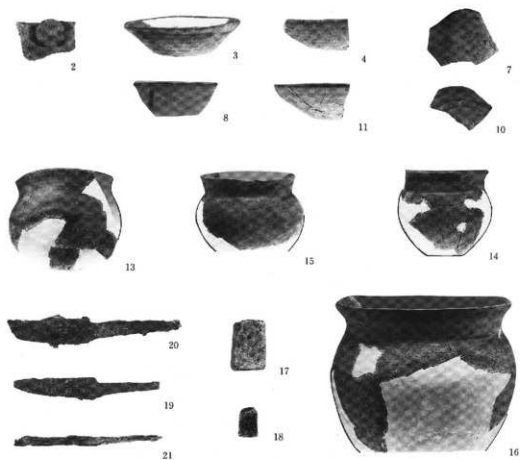


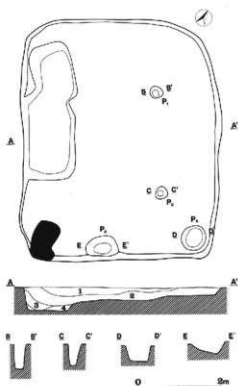
写真167 H45号住居址出土遺物

H46号住居址は、第1区Hウ・え7・8グリッドより検出された。

平面形態は、南北5.8m、東西4.8mの南北に長い隅丸方形を呈する。床面積は24.6㎡を測る。確認面からの壁高は、20cm前後である。

ピットは4個検出された。規則的な配置を示し、同等の規模を有するP1とP2が、支柱穴に該当しようか。P1は30×30cm、深さ60cm、P2は30×32cm、深さ52cmを測る。P3は48×80cm、深さ27cmの楕円形ピットで、南壁に接した位置にある。P4は径60cm、深さ40cmの円形ピットで、南東隅にある。また、西壁に接して3.3×1.3m、深さ20cm程の長方形の掘り込みが確認されている。

住居覆土は、1層がバミス・ローム粒子を僅かに含む黒褐色土、2層がバミス・ローム粒子・炭化物片を多量に含む暗褐色土である。また、長方形の掘り込み部では、バミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土（3層）と黒褐色土（4層）の堆積がみられた。



第178図 H46号住居址実測図（1：80）

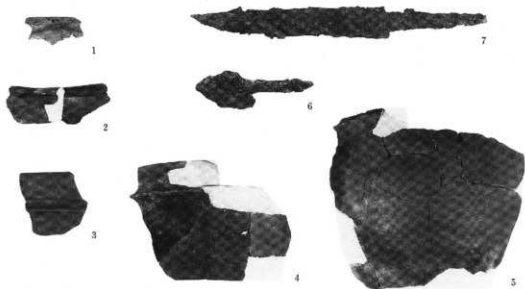


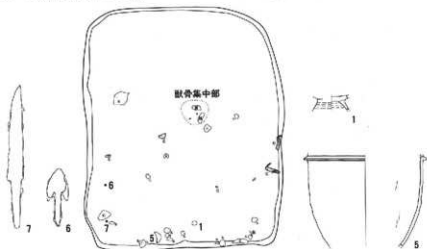
写真168 H46号住居址出土遺物



写真169 住居中央獣骨出土状態



写真170 住居南東隅獣骨出土状態



第179図 H46号住居址遺物分布図

カマド

南西隅に構築されていたことが、焼土・炭化物片・粘土の分布から把握されたが構造は明確にできなかった。

遺物

検出された主要遺物は、土師器皿・甕・羽釜、刀子・鉄鎌、そして自然遺物の獣骨片である。

1は、土師器の皿あるいは杯の脚部であり、南壁脇の1層から検出されている。

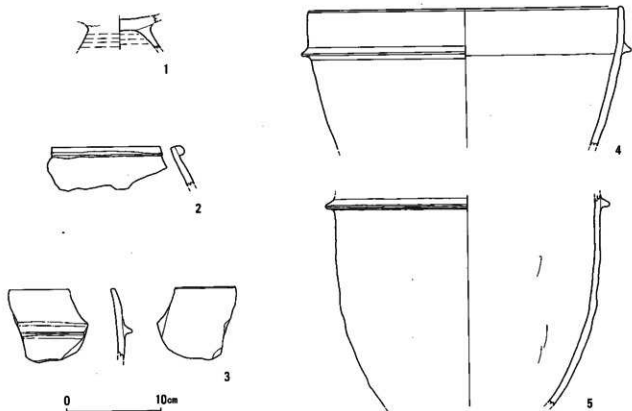
2は、口縁に隆帯を有する土師器甕の口縁部破片である。Ⅲ区2層から検出されている。

3～5は、土師器羽釜である。カマド周辺の2層から検出されている。

6は鉄鎌であり、7は刀子である。カマド周辺の1層から検出されている。

獣骨片は、住居中央部と南東隅の2箇所で見出されている。住居中央部の分布は、焼かれて粉砕した白色化骨片の密集部であった(写真169)。また、南東隅の獣骨片(写真170)は、鹿の骨片と考えられるものである。また、角礫(安山岩)の顕著な分布が南壁際で、炭化物片の分布が住居址全体で確認され、東壁脇では、炭化材の集中が確認されている。

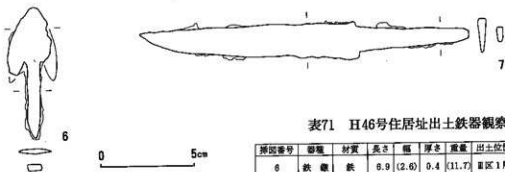
本住居址の時期は、南西隅カマドと検出された土器群の特徴から、平安時代後半・11世紀以降と考えられようか。



第180図 H46号住居址出土土器(1:4)

表70 H46号住居址出土土器観察表

検出番号	観別	形状	数量	残存	成形	調	色	出土位置	備考
1	土師器	皿	-	底部・胴上部突起	ロクロ	-胴部貼付	内面: 7.5YR7/4 外面: 7.5YR7/4 断面: 7.5YR7/4	Ⅱ区1層	
2	土師器	罎	-	破片	非ロクロ	-隆帯貼付 内面: ヨコナダ 外面: ヨコナダ	内面: 5YR4/3 外面: 5YR4/3 断面: 5YR4/3	Ⅱ区2層	
3	土師器	羽釜	-	破片	非ロクロ	-隆帯貼付 内面: 口縁ヨコナダ 外面: 口縁ヨコナダ	内面: 5YR5/4 外面: 5YR5/4 断面: 5YR5/4	Ⅱ区2層	
4	土師器	羽釜	(33.4) (14.6)	口縁1/12	非ロクロ	-隆帯貼付 内面: 口縁ヨコナダ・胴部ナダ 外面: 口縁ヨコナダ・胴部ナダ	内面: 5YR5/4 外面: 5YR5/4 断面: 5YR7/4	Ⅱ区2層	
5	土師器	羽釜	-	胴部1/4	非ロクロ	-隆帯貼付 内面: 口縁ヨコナダ・胴部ヘラナダ 外面: 口縁ヨコナダ・胴部ナダ	内面: 5YR5/3 外面: 10YR2/4 断面: 5YR5/3	Ⅱ区2層	



第181図 H46号住居址出土鉄器(1:2)

表71 H46号住居址出土鉄器観察表

検出番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
6	鉄鏃	鉄	6.9	(2.6)	0.4	(11.7)	Ⅱ区1層	
7	刀子	鉄	17.3	2.0	0.4	31.3	Ⅱ区1層	

H47号住居址は、第1 L×8グリッドより検出された。本住居址の大半は調査区域外に存在していたため、調査は北東隅の一部に限られた。

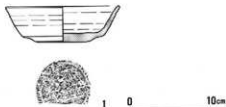
本住居址は、第Ⅲ層上部から掘り込まれており、壁体は上部が第Ⅲ層と第Ⅳ層で構成され、下部が第Ⅴ層で構成されていた。壁高は、80cm程度を測る。調査範囲では、周溝は認められていない。

ピットは、調査区壁セクションにおいて、径10cm程の柱痕が観察される径40cm、深さ60cm程度の掘り方を有する柱穴の一部が確認されている。

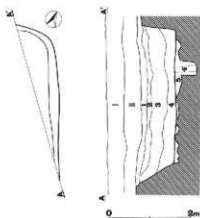
床面は、掘り方に充填されたローム主体の灰黄褐色土（5層）で形成されていた。

住居覆土は、4層に分層された。1層がバミスを含む黒褐色土、2層がバミス・ローム粒子を多く含む黒褐色土、3層がロームブロックを多量に含む褐色土、4層がロームブロックを多量に含む黒色土であった。なお、柱痕部分の覆土は、基本的に4層と同じであった。

検出された主要遺物は、3層下部から出土した、1の須恵器杯のみであった。この須恵器杯は、回転ヘラ切り手法によって底部が切り離されたものであり、底部がやや突出していた。この特徴をもつ須恵器杯は、八世紀第1四半期の土器と考えられ、本住居址の時期をおおよそ規定しよう。



第183図 H47号住居址出土土器（1：4）



第182図 H47号住居址実測図（1：80）



写真171 H47号住居址

表72 H47号住居址出土土器観察表

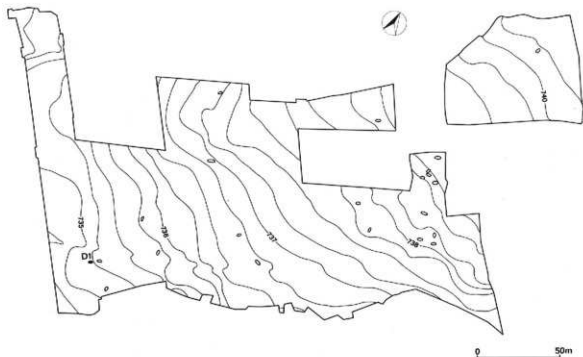
検出番号	種別	器形	口径	高さ	底径	底厚	底形	調査	色	出土位置	備考
1	須恵器	杯	(13.8) (6.7) 4.3	口縁1/8 底厚1/4	ワタキ	→底部回転ヘラ切り 外周：灰燻ナデ		内面：T.5Y7/1 外面：T.5Y7/1 断面：T.5Y7/1	3層		

表73 堅穴住居址一覧表

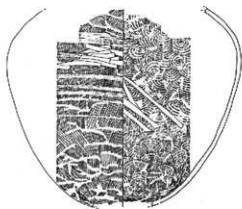
遺構名称	形態	規模				主軸方位	カマド			柱穴	周溝	時期	備考
		南北	東西	壁高	面積		位置	形態					
H1	隅丸方形	4.4	4.4	0.62	15.6	N-21'-W	北壁中央	A	4	○		古墳	
H2	隅丸方形	4.6	4.7	0.52	17.7	N-8'-W	北壁中央	A	4	○		古墳	
H3	隅丸方形	5.0		0.54			北壁中央	C1	4	○		奈良	カマドに特殊土製品使用
H4	隅丸方形	4.3	5.2	0.60	17.7	N-19'-W	北壁中央	B	4			古墳	
H5	隅丸方形	4.9	5.0	0.62			北壁中央		4	◎		古墳	
H6	隅丸方形	2.9	3.4	0.42	7.2	N-15'-W	北壁中央	E	2			奈良	カマドに須恵器製破片使用
H7	隅丸方形			0.74			北壁中央			○		古墳	
H8	隅丸方形	5.1	5.2	0.50	24.5	N-12'-W	北壁中央	A	4	○◎		古墳	
H9	方形	6.3	6.1	0.68	33.7	N-13'-W	北壁中央	A	4	○◎		古墳	
H10	方形	3.7	3.5	0.75	12.2	N-25'-W	北壁中央	C1	4	○		奈良	カマドに須恵器製破片使用
H11	隅丸方形	4.3	4.6	0.67	16.3	N-14'-W	北壁中央	A	4	○◎		古墳	
H12	隅丸方形	4.8	4.9	0.57	20.1	N-10'-W	北壁中央	A	4	○◎		古墳	
H13	隅丸方形	3.5	3.5	0.73	9.9	N-23'-W	北壁中央	C2	2	○		奈良	
H14	隅丸方形	5.7	5.4	0.48	27.7	N-20'-W	北壁中央	A	4	○◎		古墳	
H15	隅丸方形	5.2	5.4	0.72	24.8	N-12'-W	北壁中央	A	4	○◎		古墳	
H16	方形	5.0	5.2	0.64	23.6	N-5'-W	北壁中央	A	無			古墳	
H17	隅丸方形	3.8	3.8	0.82	11.1	N-23'-W	北壁中央	C	無			奈良	
H18	隅丸方形	4.4		0.56			北壁			○		奈良	
H19	隅丸方形	4.9	4.6	0.64	16.8	N-25'-W	北壁中央	D1	4	○		奈良	
H20	隅丸方形	4.4	4.4	0.54	16.1	N-5'-W	北壁中央	A	4	○		古墳	南側に張り出しピットを有する
H21	隅丸方形	6.4	5.9	0.84	31.3	N-16'-W	北壁中央	D1	4	○		奈良	壁面に土師器製使用・石列を有する
H22	隅丸方形	5.5	5.1	0.72	24.0	N-19'-W	北壁中央	D1	4	○		奈良	
H25	隅丸方形	5.0	5.2	0.84	20.7	N-23'-W	北壁中央	D1	4	○		奈良	
H26	隅丸方形	4.0	3.9	0.70	11.1	N-17'-W	北壁中央	D2	無	○		平安	
H27	隅丸方形	4.7	4.7	0.86	19.0	N-21'-W	北壁中央	D1	4	◎		奈良	
H28	隅丸方形	4.7	4.7	0.54	19.0	N-20'-W	北壁中央	A	4	◎		古墳	
H30	隅丸方形	5.1	5.0	0.58	21.7	N-32'-W	北壁中央	D1	4	○		奈良	
H31	隅丸方形	2.3	2.7	0.24	4.5	N-48'-W	北壁東隅		無			奈良	
H32	隅丸方形	3.2	3.2	0.81	7.1	N-8'-W	北壁中央					奈良	掘り方のみ
H33	隅丸方形	4.6	4.2	0.50	15.5	N-25'-W	北壁中央	D3	4	○		奈良	床下ピットを有する
H34	隅丸方形	4.5	4.8	0.58	17.7	N-30'-W	北壁中央	D1	4			奈良	
H35	隅丸方形	3.3	3.9	0.45	9.6	N-30'-W	北壁中央	D1	2			奈良	
H36	隅丸方形	4.7	4.7	0.76	16.1	N-27'-W	北壁中央	D3	4	○◎		奈良	
H37	隅丸方形	5.7	5.5	0.61	25.8	N-25'-W	北壁東寄	C2	4	◎		奈良	煙道に土師器製使用
H38	隅丸方形		3.7	0.54		N-30'-W	北壁中央	D3	4			奈良	
H39	隅丸方形	4.0	4.2	0.48	13.1	N-39'-W	北壁中央	D2	4	○		奈良	煙道に土師器製使用
H40	隅丸方形	5.7		0.44			北壁中央	D	4	○		平安	
H41	隅丸方形		3.5	0.42			北壁中央		4			平安	
H42	隅丸方形	5.3	4.8	0.50	22.1	N-30'-W	北壁中央	D3	4	○		平安	煙道に土師器製使用
H43	隅丸方形	4.5	3.7	0.26	11.9	S-72'-E	南壁東隅					平安	
H44	隅丸方形	3.7	3.5	0.44	11.0	N-27'-W	北壁中央	D3	○			平安	
H45	隅丸方形	5.3	5.0	0.42	21.9	N-35'-W	北壁中央	D3	4	◎		平安	
H46	隅丸方形	5.8	4.8	0.21	24.6	S-14'-W	南壁西隅					平安	
H47	隅丸方形			0.80								奈良	

柱穴○は南壁中央ピットの存在、周溝○は一部存在・◎は全周を示す。単位はm、㎡

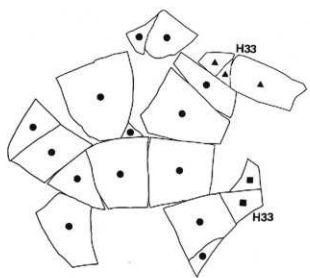
Ⅲ 豎穴状遺構・土坑



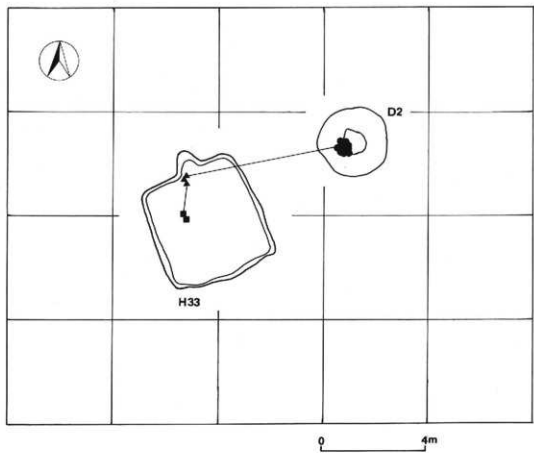
第184図 上聖端・聖原遺跡の陥穴分布



D2-10



(1:8)



第185図 D 2号土坑とH33号住居址間接合の土器

(1) T a 1号竪穴状遺構

古墳時代

T a 1号竪穴状遺構は、第1区Pか・き4グリッドより検出された。

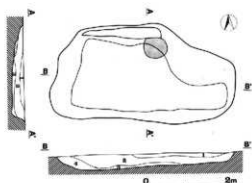
平面形態は、南北2.4m、東西4.4mの歪んだ隅丸長方形を呈し、床面積は4.6㎡を測る。

壁は緩やかに立ち上がり、北壁西半部分にテラスを有する。確認面からの壁高は20~34cmを測る。

北壁際の中央部に焼土の堆積がみられた。床面は比較的強固であったが、ピットは確認されていない。

覆土は、4層に分層された。1層は黒褐色土、2層はバミス・ローム粒子を多量を含む暗褐色土、3層は褐色土である。4層はバミス・ローム粒子を多量を含む黒褐色土で、西壁際にみられた覆土である。

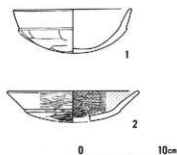
遺物は、土師器杯2点が焼土右脇から検出された。1の土師器杯は、中央部に稜を有するもので、2の土師器杯は、下部に稜を有し、内面に黑色処理が施されたものである。以上の土師器杯は、古墳時代後期の土器と考えられることから、本址の構築時期は古墳時代後期と考えられる。



第186図 T a 1号竪穴状遺構実測図 (1:80)



写真172 T a 1号竪穴状遺構



第187図 T a 1号竪穴状遺構出土土器 (1:4)



写真173 T a 1号竪穴状遺構出土土器

表74 T a 1号竪穴状遺構出土土器観察表

発見番号	種別	器形	数量	保存	形状	調査	色調	出土位置	備考
1	土師器	杯	(14.3) — 8.5	口縁1/2 底面欠片	深口杯	内面:みこみ筋ナゲ→口縁ヨコナゲ 外面:底面ヘラケズリ→口縁ヨコナゲ	内面:7.5Y R7/4 外面:7.5Y R7/4 断面:7.5Y R7/4	1区2層	
2	土師器	杯	(16.0) (3.1)	口縁1/3	深口杯	内面:ヘラミガキ→黒色処理 外面:口縁ヨコナゲ→底面ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面:7.5Y R5/3 外面:7.5Y R4/2	1区2層	

(2) T a 2号竪穴状遺構

古墳時代

T a 2号竪穴状遺構は、第1区Mえ1グリッドより検出され、自然流路(M9号溝状遺構)の覆土に掘り込まれていた。

平面形態は、南北3.6m、東西2.4mの楕円形を呈し、床面積は5.7㎡であり、大形土坑とも判断できる遺構である。主軸方位はN-12°-Wを指す。確認面からの壁高は5~15cm前後である。底

面は軟弱な状態で床面と判断できる程のものではない。ピットは確認されていない。なお、北壁際で粘土ブロックの分布がみられた。

覆土は1層のみで、黒褐色粘質土である。

遺物は、古墳時代後期の土器と考えられる胴上部に最大径を有する土師器球胴甕が、東壁際で潰れた状態で検出された。

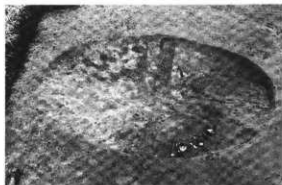
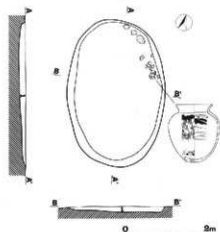
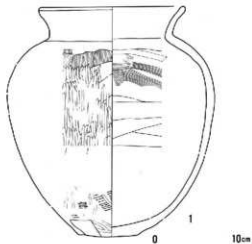


写真174 T a 2号竪穴状遺構

第188図 T a 2号竪穴状遺構実測図(1:80)



第189図 T a 2号竪穴状遺構出土土器(1:4)



写真175 T a 2号竪穴状遺構出土土器

表75 T a 2号竪穴状遺構出土土器観察表

図番	新図番	物形	数量	残存	成形	質	製	色調	出土位置	備考
1		土師器	17.7 7.2 28.3	1/2 流布完形	弁コト	内面:白釉コナダ・肩彫毛目・胴部一気焼ヘラナダ 外面:胴部彫毛目後ナダ・ヘラキガキヘ口縁コナダ・ 底彫ヘラコズリ後ナダ	内室:7.5YR5/4 外室:7.5YR7/4 断面:7.5YR6/4	1区次出		

(3)D1号土坑

縄文時代

D1号土坑は、第1区Hき2・3グリッドより検出された。

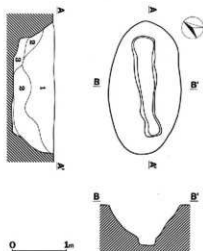
平面形態は、上場が245×130cmの楕円形を呈し、下場が180×30cmの隅丸長方形を呈する。断面形態は長・短軸共に、底部で15cm程直立し、上場に向かって朝顔形に開く在り方を呈している。深さは80cm程を測る。底部は平坦で施設はみられない。

覆土は3層に分層された。1層はパミスを僅かに含む黒褐色土、2層はパミス・ローム粒子を多量に含む暗褐色土、3層はパミス・ローム粒子を含む暗褐色土である。

本土坑からは遺物は検出されなかった。

以上の形態の特徴から、本土坑は、縄文時代に属する陥穴と考えられる。上聖端遺跡の立地する台地では、縄文時代の集落は確認されていないが、聖原遺跡の調査区においても、等高線に沿った一定の配置性を示す21基の陥穴（第184図）が検出されている（聖原遺跡の調査区で検出された陥穴は、底面に2～4個のピットを有する形態が主体である）。また、縄文土器の検出は極めて少ないが、それに対して石籬の検出割合は極めて高い。この状況は、本台地が狩り場として利用されていたことを端的に示している。

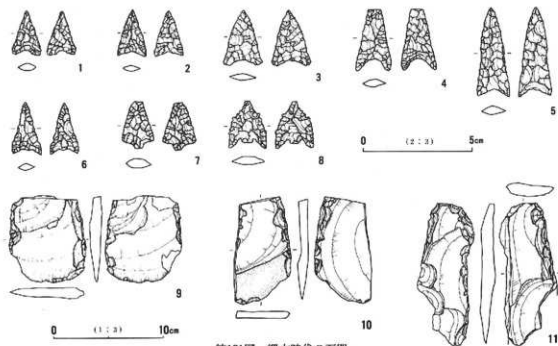
上聖端遺跡の調査区においても、石籬の出量は多く、遺構の覆土・第Ⅲ層等から計8点の石籬（1～8）が検出されている。1・5が第Ⅲ層、7が表面採取で、その他が遺構出土のものであるが、検出された遺構に伴う遺物とはまず考えられないであろう。形態的には無茎・有茎のものがあ、なかには弥生時代に属すると考えられるもの（5など）もあるが、概ね縄文時代の石籬と理解されるものである。また、陥穴の構築ないし植物食料獲得等に用いられたと考えられる打製石斧3点が遺構覆土から検出されている。



第190図 D1号土坑実測図（1：60）



写真176 D1号土坑



第191図 縄文時代の石器

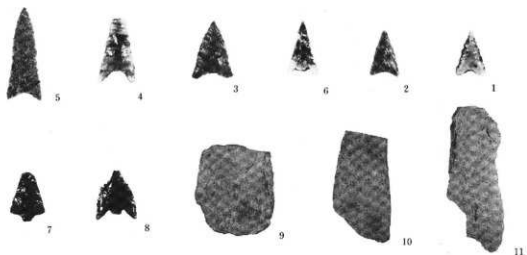


写真177 縄文時代の石器

表76 縄文時代の石器観察表

発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考	発掘番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
1	石 鏃	黒曜石	2.0	1.3	0.4	0.8	1 K 沖 8		7	石 鏃	黒曜石	(2.2)	1.5	0.5	(1.3)	表掘採取	
2	石 鏃	チャート	2.2	1.4	0.4	0.8	H25 E 2		8	石 鏃	黒曜石	(2.2)	1.8	0.4	(1.2)	H33 E 1	
3	石 鏃	チャート	2.6	1.9	0.3	1.1	H12 E 1		9	石 斧	安山岩	(8.0)	6.9	1.1	(78.6)	H14 E 2	
4	石 鏃	黒曜石	(2.6)	1.7	0.4	(1.5)	D 2 田 1		10	石 斧	安山岩	9.5	5.1	0.9	62.0	H12 N 1	
5	石 鏃	チャート	4.2	1.6	0.6	1.9	1 P 沖 6		11	石 斧	安山岩	(13.0)	4.5	1.4	(67.0)	H28 N 3	
6	石 鏃	黒曜石	2.4	1.4	0.4	0.8	H 3 E 2										

(4)D 2号土坑

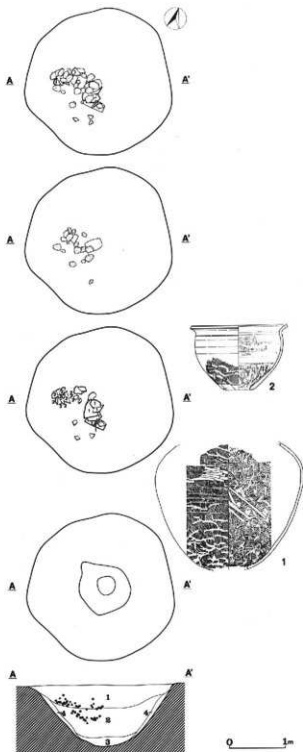
奈良時代

D 2号土坑は、第1区Lあ10グリッドより検出された。

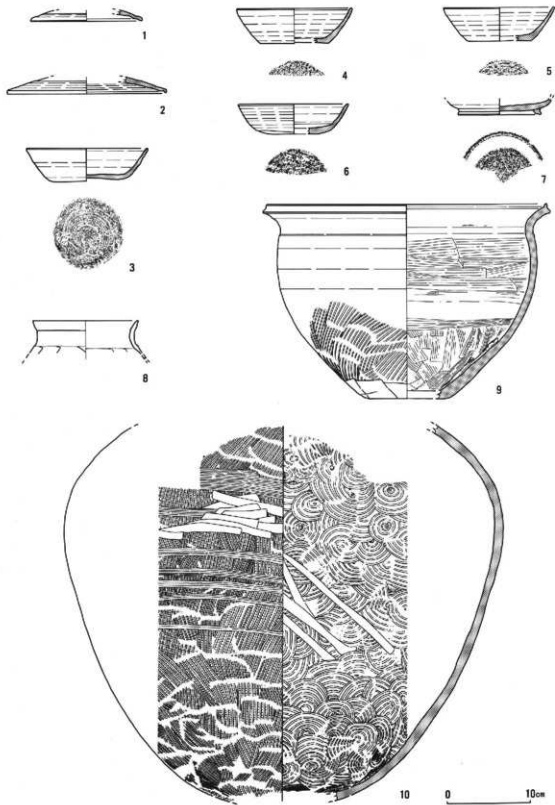
平面形態は、南北2.6m、東西2.7mの円形を呈する。断面形態は、すり鉢状を呈し深さ115cm程を測る。

覆土は4層に分層された。1層は暗黒褐色土、2層は黒褐色土、3層はバミス・ローム粒子を多く含む褐色土、4層はバミス・ローム粒子を多く含む暗褐色土である。

本土坑から出土した遺物には、奈良時代後半・八世紀第Ⅳ四半期～9世紀初等ごろの土器と考えられる須恵器蓋・坏・甕、土師器壺と軽石がある。これらは2層上面前後に一括廃棄されていたものである。その廃棄過程は、須恵器甕(9・10)の破片を折り重ねた状態で廃棄し、その後軽石が廃棄されるという傾向を示していた。注目されることは、破片が集中的に廃棄されていた須恵器甕(10)に、H33号住居址から検出された破片5点が接合したことである(第185図)。H33号住居址のそれは、カマドに廃棄されていた破片3点とⅡ区3層から検出された破片2点である。また、集中的に廃棄されていた軽石は、面取りされているもの、火熱を受けているもの、支脚石の破片から構成されていた。このことは、廃棄された軽石が、いずれかの住居址においてカマドの構築材として用いられていたことを示し、その住居址のカマド破壊後に一括廃棄された過程が想定される。今のところ、須恵器甕の接合関係からH33号住居址との関連が濃厚である。ところで、佐久市池端遺跡から検出された類似土坑では、礫と共に獣骨が多量に出土したことから、雨乞い等の農耕祭に関わる遺構としての評価がなされている。



第192図 D 2号土坑実測図(1:60)



第193图 D 2号土坑出土土器 (1:4)

表77 D 2号土坑出土土器観察表

種類 番号	種類	器形	法量	残存	成 形	内 容	色 調	出土位置	備 考
1	灰皿器	高	(13.6) — (1.3)	口縁1/5	コタロ	外面：天井部回転ヘラケズリ	内面： N7/0 外面： N7/0 断面： N7/0	1層	
2	灰皿器	高	(19.4) — (2.9)	口縁1/10	コタロ	外面：天井部回転ヘラケズリ	内面： 7.5Y5/1 外面： 5 Y5/1 断面： 7.5 Y5/1	2層	
3	灰皿器	杯	(14.5) 9.0 4.1	口縁1/4 底部完形	コタロ	→底部回転糸切り	内面： 5 Y5/1 外面： 5 Y5/1 断面： 5 Y5/1	2層	火跡あり
4	灰皿器	杯	(14.2) (8.5) 4.3	口縁1/5 底部1/4	コタロ	→底部回転糸切り	内面： 10 Y5/1 外面： 10 Y5/1 断面： 10 Y5/1	2層	火跡あり
5	灰皿器	杯	(13.4) 7.4 4.1	口縁～ 底部1/5	コタロ	→底部回転糸切り	内面： N6/0 外面： N6/0 断面： N6/0	1層	火跡あり
6	灰皿器	杯	(13.4) (9.2) 3.7	口縁～ 底部1/4	コタロ	→底部回転糸切り 外面：底部手押しヘラケズリ	内面： 7.5 Y5/1 外面： 7.5 Y5/1 断面： 7.5 Y5/1	2層	火跡あり
7	灰皿器	杯	(10.2) (2.0)	底部1/3	コタロ	→底部切り離し（切り離し方不明）→高台筋付 外面：底部手押しヘラケズリ	内面： N4/0 外面： N4/0 断面： 5 Y R5/2	2層	
8	土製器	高	— (4.6)	口縁1/2	赤コタロ	内面：胴部ヘラケズリ→口縁コナデ 外面：胴部ヘラケズリ→口縁コナデ	内面： 5 Y R5/3 外面： 5 Y R4/1 断面： 5 Y R5/3	1層	
9	灰皿器	浅	(14.0) (10.6) 23.5	口縁～ 底部1/2	コタロ	内面：胴部→底部ナデ（刷毛状工具） 外面：胴部下子印き目→底部および外周手押しヘラケズリ	内面： 7.5 Y R5/2 外面： 5 Y R6/6 断面： 5 Y R7/6	2層	
10	灰皿器	浅	— (45.8)	胴部1/2	コタロ	内面：同心円文→部分的にナデ 外面：叩き目→カキ目	内面： N6/0 外面： N6/0 断面： N6/0	2層	

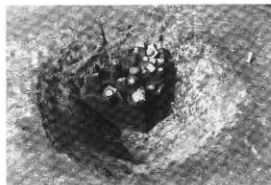


写真178 D 2号土坑遺物出土状態

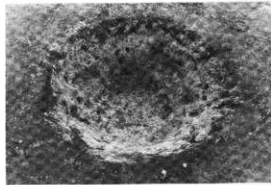


写真179 D 2号土坑



写真180 土器10出土状態

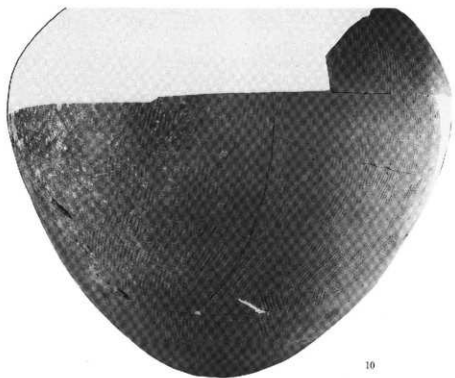
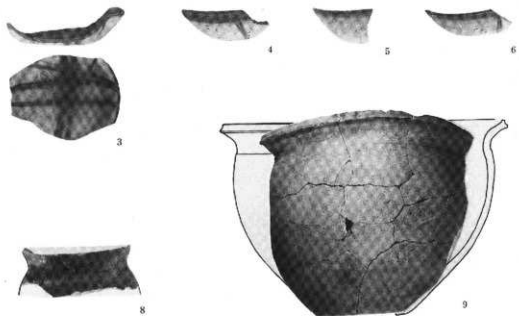
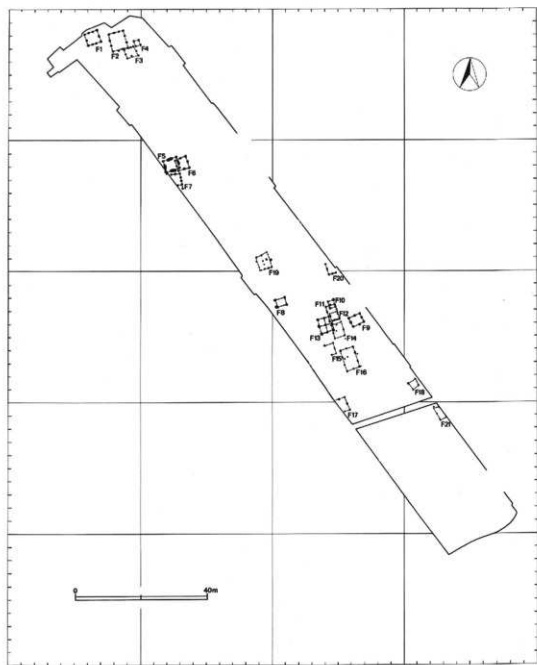


写真181 D 2号土坑出土遺物

IV 掘立柱建物址



第194図 掘立柱建物址の分布

本報告で記載する掘立柱建物址は19棟（F1号掘立柱建物址からF19号掘立柱建物址）である。

掘立柱建物址の分布は、おおむね、以下の3箇所の分布域を構成している。

第1の分布域は、調査区北端部にある。H1号住居址とH2号住居址の間に、F1号からF4号掘立柱建物址までの4棟が存在する。このうち、F2号掘立柱建物址とF3号掘立柱建物址に切り合い関係がある。

第2の分布域は、調査区北半中央部・H12号住居址西側にある。F5号からF7号掘立柱建物址までの3棟が存在する。F5号掘立柱建物址とF6号掘立柱建物址が重複関係にある。また、F6号掘立柱建物址がH12号住居址を切っている。

第3の分布域は、調査区南半北部を中心とした位置にある。F9号からF16号掘立柱建物址までの8棟で密集部が構成されている。また、その周辺部の北側にF19号掘立柱建物址とF8号掘立柱建物址が単独で存在し、南側にF17号掘立柱建物址とF18号掘立柱建物址が単独で存在する。密集部を構成する掘立柱建物址群では、F10号掘立柱建物址とF11号掘立柱建物址が重複関係、F11号掘立柱建物址からF13号掘立柱建物址が重複・切り合い関係、F13号掘立柱建物址とF14号掘立柱建物址が重複関係にある。また、F8号掘立柱建物址がH21号住居址を切り、F15号掘立柱建物址がH26号住居址によって切られている。なお、この密集部は浅い谷部を占拠している。

形態は、総柱式のもの1棟で、側柱式のもの18棟である。

総柱式のもの（F13号）は、桁×梁の柱配置が3本×3本（2間×2間）の正方形を呈するものである。4.7m×4.0mの規模を有する。

完備した側柱式のものには、以下の多様性が示されていた。

A：桁×梁の柱配置が2本×2本（1間×1間）の正方形を呈するもの。4棟（F4・F8・F10・F12）が確認された。2.0～2.8m×1.8～2.4mの規模を有する。

B：桁2本、梁2・3本の柱配置で、正方形を呈するもの（F18）。2.5m×2.4mの規模を有する。

C：桁×梁の柱配置が3本×2本（2間×1間）の長方形を呈するもの（F14）。4.4m×3.2mの規模を有する。

D：桁×梁の柱配置が3本×3本（2間×2間）の正方形を呈するもの。2棟（F6・F9）が確認された。3.5～3.8m×3.0～3.4mの規模を有する。

E：桁3・4本、梁3本の柱配置で、正方形を呈するもの（F3）。3.4m×2.9mの規模を有する。

F：桁×梁の柱配置が4本×3本（3間×2間）のもの。正方形を呈するもの1棟（F1、4.0m×3.6mの規模を有する）と長方形を呈するもの2棟（F11・F16、4.8～6.5m×3.2～4.0mの規模を有する）が確認された。

G：桁3・4本、梁3・4本の柱配置で、長方形を呈するもの（F19）。3.8m×4.8mの規模を有する。

F：桁×梁の柱配置が4本×4本（3間×3間）のもの。正方形を呈し、溝持ちのもの1棟（F5、4.3m×3.6mの規模を有する）と長方形を呈するもの1棟（F2、5.5m×4.6mの規模を有する）が確認された。

掘立柱建物址の時期決定は困難であるが、推定根拠として以下の状況がある。

遺物からは、F1号・F5号・F7号掘立柱建物址で古墳時代後期の土器片が検出され、F2号掘立柱建物址で古墳時代後期と奈良時代の土器片、F8号・F11号・F16号掘立柱建物址で奈良時代の土器片が検出されている。このことは、各掘立柱建物址の時期が、検出された土器と同時期か、それ以降の時期ということを示す。

住居址との切り合い関係からは、F6号掘立柱建物址が古墳時代後期かそれ以降の時期、F8号掘立柱建物址が奈良時代後半かそれ以降の時期、F15号掘立柱建物址が平安時代前半かそれ以降の時期となる。

分布からは、F1号掘立柱建物址からF7号掘立柱建物址が、古墳時代後期集落の主要領域にあり、F8号掘立柱建物址からF19号掘立柱建物址が、奈良時代集落の主要領域にある。

以上を総合すると、F1号・F5号・F7号掘立柱建物址の時期に、古墳時代後期の可能性が推定でき、F15号あるいはF8号掘立柱建物址の時期に、平安時代の可能性が推定できようか。奈良時代集落の主要領域にあるF9号～F14号・F16号～F18号掘立柱建物址の時期は、奈良時代の各時期のものと考えることが妥当であろう（また、F2号・F3号掘立柱建物址は、奈良時代に推定できる根拠があろうか）。

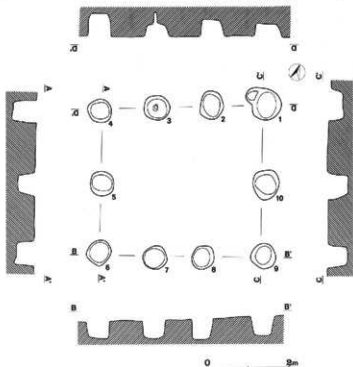
(1) F 1号掘立柱建物址

F 1号掘立柱建物址は、第Ⅱ区Jえ・お2・3グリッドにおいて検出された。

本址は、3間×2間(4.0m×3.6m)の欄柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。柱間は北・南列1.4m、東・西列1.7m程度である。主軸方向はN-73°-Eを指す。

ピットの掘り方は、径60~70cm前後の円形を呈し、深さは32~58cmを測る。埋土はロームと黒褐色土からなる。P 3底面では直径10cm程度の柱痕部の掘り込みがみられた。

ピットの埋土から、古墳時代後期の土師器壺小破片2点が検出されている。



第195図 F 1号掘立柱建物址実測図(1:80)

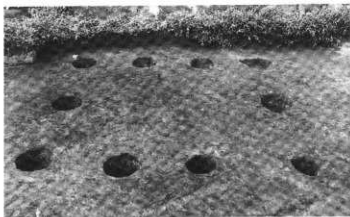


写真182 F 1号掘立柱建物址

(2) F 2号掘立柱建物址

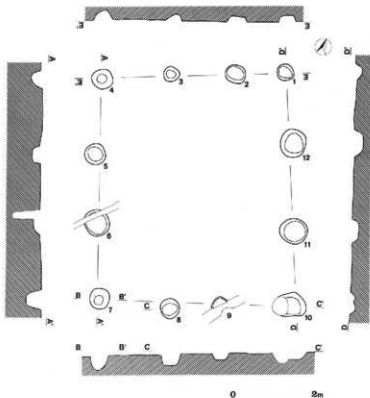
F 2号掘立柱建物址は、第Ⅱ区Jい・う2・3グリッドにおいて検出された。耕作溝によってP 6・P 9が、F 3号掘立柱建物址によってP 10が切られている。

本址は、3間×3間(5.5m×4.6m)の側柱式の掘立柱建物址である。柱間は桁行で平均1.9m、梁間で平均1.5m程度である。主軸方向はN-15°

-Wを指す。

ピットの掘り方は、円形を基本とし、規模は長径38~82cm、深さ12~36cmの範囲にある。埋土はロームと黒褐色土からなる。

遺物は、ピットの埋土から古墳時代後期の土器と考えられる土師器坏・甕破片、奈良時代の土器と考えられる須恵器坏破片が検出されている。



第196図 F 2号掘立柱建物址実測図(1:80)



写真183 F 2号掘立柱建物址

(3) F 3号掘立柱建物址

F 3号掘立柱建物址は、第Ⅱ区Jあ・い4グリッドより検出された。P 6が耕作によって破壊されている。本址は、北列3間・南列2間×東・西列2間(3.4m×2.9m)の掘立柱建物址と考えられるが、南列のP 7は内側に位置し、検討の余地を残す。柱間はP 2・P 3間で1.1m、P 1・P 9間で1.5mを測る。主軸方向はN-74°-Eを指す。ピットの掘り方は、径40~50cm前後の円形を呈し、深さは四隅の柱穴が深く(38~50cm)、その中間の柱穴は浅い(18~30cm)。埋土はロームと黒褐色土からなる。遺物は検出されていない。

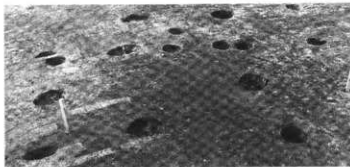
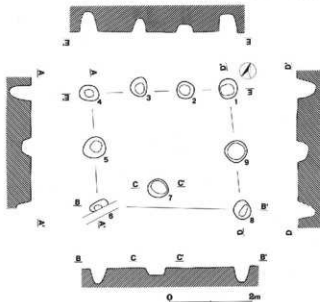


写真184 F 3・4号掘立柱建物址



第197図 F 3号掘立柱建物址実測図(1:80)

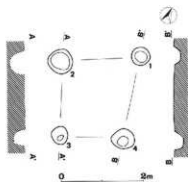
(4) F 4号掘立柱建物址

F 4号掘立柱建物址は、第Ⅱ区Jあ3グリッドより検出された。

本址は、1間×1間(2.0m×1.8m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址と考えられるが、東列のP 4はずれた配置にある。主軸方向はN-13°-Wを指す。

ピットの掘り方は、円形を呈し、P 1は径45cm、深さ12cm、P 2は径60cm、深さ34cm、P 3は45×40cm、深さ31cm、P 4は55×48cm、深さ24cmを測る。埋土はロームと黒褐色土からなる。

遺物は検出されていない。



第198図 F 4号掘立柱建物址実測図

(1:80)

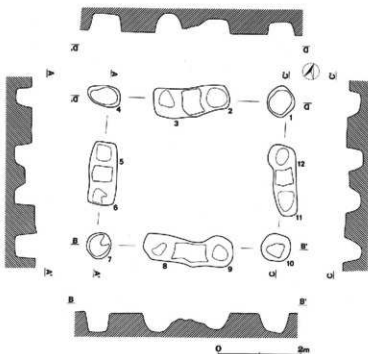
(5) F 5号掘立柱建物址

F 5号掘立柱建物址は、第1区Pく・け2・3グリッドにおいて検出された。F 6号掘立柱建物址と重複するが、構築時期の前後関係はピットの切り合いがないため不明である。

本址は、3間×3間(4.3m×3.6m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。柱間は桁行で1.5m前後、梁間で1.1~1.3m前後である。主軸方向はN-71°-Eを指す。

ピットの掘り方は、円形ないし楕円形で長径70cm前後、深さ40cm前後である。また、P 2・P 3、P 5・P 6、P 8・P 9、P 11・P 12は、幅60~70cm、深さ20cm前後の溝によって連結されている。埋土の基本的な在り方はローム・パミスを多量に含む褐色土である。

ピットの埋土から、古墳時代後期の土器と考えられる土器器壁破片が数点検出されている。



第199図 F 5号掘立柱建物址実測図(1:80)



写真185 F 5号掘立柱建物址

(6) F 6号掘立柱建物址

F 6号掘立柱建物址は、第1区Pき・く2・3グリッドにおいて検出された。H12号堅穴住居址を切る。

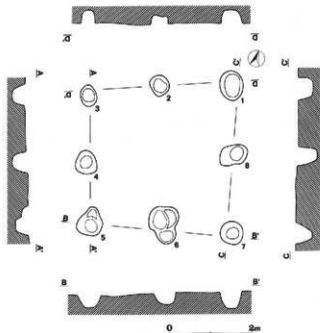
本址は、2間×2間(3.5m×3.4m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。

柱間は北・東列で1.8m、西列で1.6m、南列で

1.6m・1.8mを測る。主軸方向はN-73°-Eを指す。

ピットの掘り方は、円形ないし楕円形で、長径55~80cm、深さ20~43cmの規模を有する。埋土は基本的に黒褐色土である。

遺物は検出されていない。



第200図 F 6号掘立柱建物址実測図(1:80)

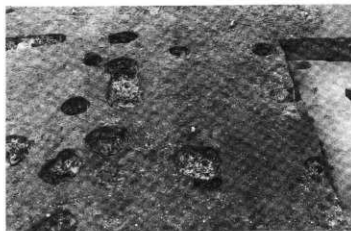


写真186 F 6号掘立柱建物址

(7) F 7号掘立柱建物址

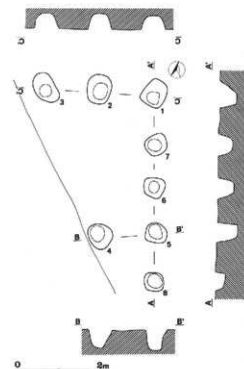
F 7号掘立柱建物址は、第1区Pく3・4グリッドにおいて検出された。西列側が調査区域外であるため全貌は不明である。

北列で2間(2.7m)、東列で3間(3.3m)の柱配置が確認されている。東列に並ぶP 8は廂のピットとも考えられるが定かではない。柱間は北

列で1.3m、東列で1.1~1.2mを測る。

ピットの掘り方は、円形ないし楕円形で、長径55~70cm、深さ33~50cmの規模を有し、P 8は深さ23cmと浅い。埋土は黒褐色土と褐色土からなる。

ピットの埋土から、古墳時代後期と考えられる土師器杯・壺小破片が検出されている。



第201図 F 7号掘立柱建物址実測図(1:80)

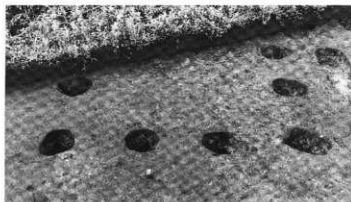


写真187 F 7号掘立柱建物址

(8) F 9号掘立柱建物址

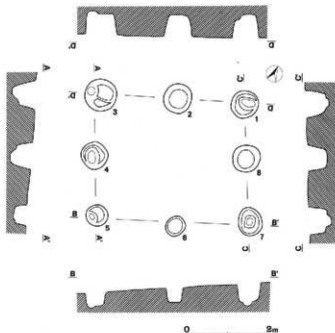
F 9号掘立柱建物址は、第1区しえ4グリッドにおいて検出された。

本址は、2間×2間(3.8×3.0m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。主軸方向はN-66°-Eを指す。

柱間は、北列で1.7m・2.1m、西列で1.6m・1.5m、南列で2.0m・1.8m、東列で1.4m・1.6mである。

ピットの掘り方は、円形ないし楕円形を呈し、長径48~78cm、深さ55cm前後である。P 1とP 3からP 5、そしてP 7の底面において、径20cm前後の柱痕が確認されている。その位置は、P 7では中央であるが、東列のP 1は東側、西列のP 3~5では西側によっていた。埋土はロームと黒褐色土からなる。

本址からは、遺物は検出されていない。



第202図 F 9号掘立柱建物址実測図(1:80)

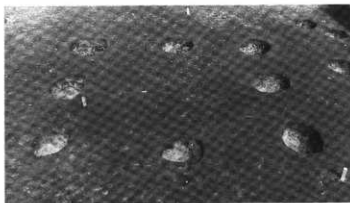


写真188 F 9号掘立柱建物址

(9) F11号掘立柱建物址

F11号掘立柱建物址は、第I区Lか3・4グリッドにおいて検出された。F10号掘立柱建物址・F12号掘立柱建物址・F13号掘立柱建物址と重複関係にあり、F13号掘立柱建物址のP1によって、本址のP5が切れられ、F12号掘立柱建物址のP4によって、本址のP8が切られていた。

本址は、長方形を呈し、3間×2間(4.8m×3.2m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。主軸方向はN17°-Wを指す。

柱間は、北列間と南列間では1.5m～1.7m、東列間と西列間では1.4m～2.0mを測る。

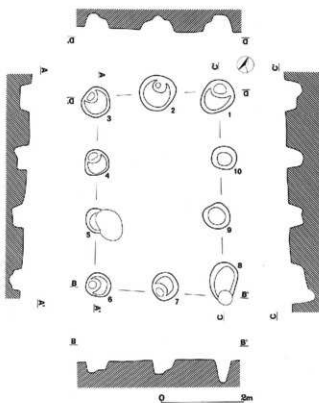
ビットの掘り方は、円形ないし楕円形を呈し、規模は長径60～90cm、深さ24～40cmの範囲にある。

底面で20cm前後の柱痕が認められるビットがあり、その柱痕の位置は、北列ではビット内北側、西列ではビット内西側、南列ではビット内南側という傾向を示していた。

埋土は、基本的に黒褐色土と黒色土の堆積であった。

ビットの埋土から、比較的多くの須恵器破片、土師器破片が検出されている。

須恵器には、蓋と杯の破片、土師器には壺の破片がみられた。そのうち、特徴が捉えられるものとして、底部切り離し手法が、回転ヘラ切りによる須恵器杯の底部破片が3点が検出された。これらを基草資料とすると、F11号掘立柱建物址の構築時期は、奈良時代前半か、それ以降の時期のものと考えられる。



第203図 F11号掘立柱建物址(1:80)

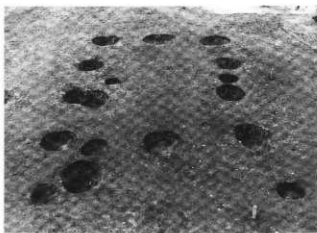


写真189 F11・12号掘立柱建物址

(10) F13号掘立柱建物址

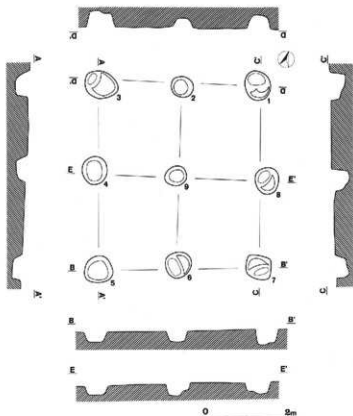
F13号掘立柱建物址は、第1区Lか・き4・5グリッドより検出された。F11号・F12号・F14号掘立柱建物址と重複関係にあり、F11号掘立柱建物址を切る。

本址は、2間×2間(4.7m×4.0m)の総柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。主軸方向は

N-18°-Wを指す。

柱間は北列間と南列間で1.8m~2.2m、東列間と西列間で2.3m~2.4mを測る。

ピットの掘り方は、円形を基本とし、規模は長径50~80cm、深さ22~36cm程度である。埋土はロームと黒色土からなる。遺物は検出されていない。



第204図 F13号掘立柱建物址実測図(1:80)

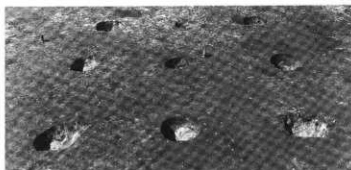


写真190 F13号掘立柱建物址

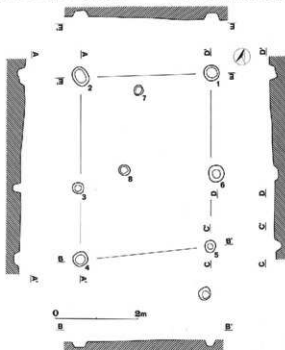
(11) F14号掘立柱建物址

F14号掘立柱建物址は、第1区Lお・か5グリッドにおいて検出された。F13号掘立柱建物址と重複関係にあるが、切り合い関係がないため、時期の前後関係は不明である。

本址は、2間×1間(4.4m×3.2m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。また、内部に2個、P5の南側に1個のピットがみられたが、

本址との関係は定かではない。主軸方向はN-16°-Wを指す。柱間は北・南列間3.2m、東・西列間1.7m~2.8mを測る。

ピットの掘り方は、円形を呈し、規模は長径27~50cm、深さ12~22cmの範囲にある小形のものである。埋土は黒褐色土であり、P1から土師器の小破片3点が検出された。



第205図 F14号掘立柱建物址実測図(1:80)

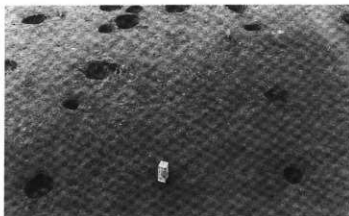


写真191 F14号掘立柱建物址

(12) F15号掘立柱建物址

F15号掘立柱建物址は、第Ⅰ区Lか6・7グリッドより検出された、H26号住居址によって西列が破壊されている。

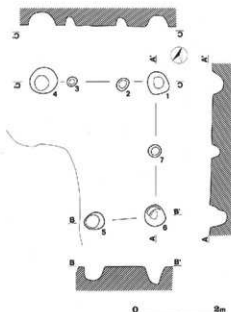
本址では、北列で3間(2.9m)、東列で2間(3.3m)の柱配置が確認されている。

柱間は北列ではP1とP2間(0.9m)、P3とP4間(0.8m)が狭く、P2とP3間(1.3m)

が広い、東列間は1.7m・1.6mを測る。

ピットの掘り方は、円形を呈し、規模は長径50～65cm、深さ27～42cmの相対的に大形のピットがコーナーと南列にあり、長径25～35cm、深さ20cm程度の相対的に小形のピットが北・東列の中間に位置している。埋土は黒色土である。

本址からは、遺物は検出されていない。



第206図 F15号掘立柱建物址実測図(1:80)

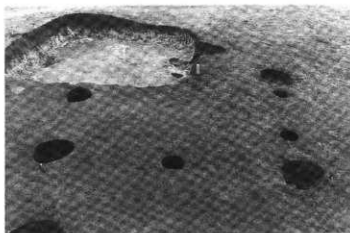


写真192 F15号掘立柱建物址

(13) F16号掘立柱建物址

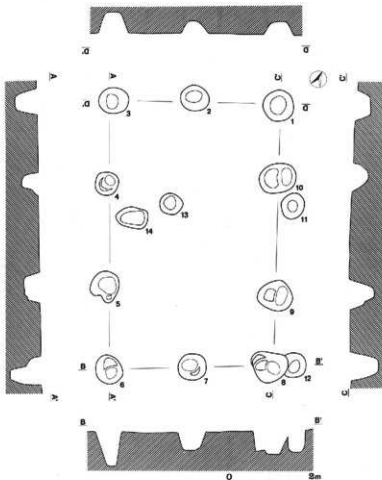
F16号掘立柱建物址は、第1区Lえ・お6・7・8グリッドより検出された。検出面は第Ⅲ層である。

本址は、長方形を呈し、3間×2間(6.5×4.0m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。その柱穴以外に、P8に切られたP12、東西に並ぶP11とP13、埋土に炭化物片を含むP14が検出されたが、本址との関係は定かではない。主軸方向はN-18°-Wを指す。

柱間は、東列のP9とP10の間(2.9m)、西列のP4とP5の間(2.6m)が広く、東列のP1とP10の間、P9とP8の間(1.8m前後)が狭いが、他は2.0m前後である。

ピットの掘り方は、円形ないし楕円形を呈し、長径60~90cm、深さは30~70cm前後であり、コーナーのP3・P6・P8が深い傾向にある。

ピットの埋土は、基本的に黒色土であった。その埋土から、奈良時代の土器と考えられる土器器環・甕の小破片数点が検出され、本址は奈良時代か、それ以降の時期のものと考えられる。



第207図 F16号掘立柱建物址実測図(1:80)

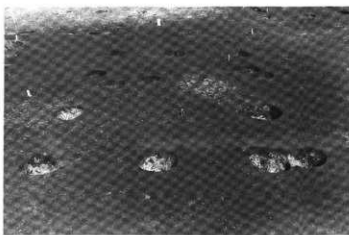


写真193 F16号掘立柱建物址

(14) F17号掘立柱建物址

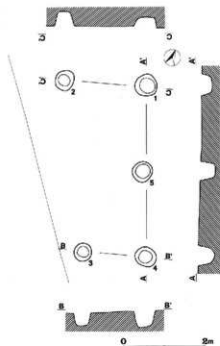
F17号掘立柱建物址は、第1区Lお10・Mお1グリッドより検出された。西列側は調査区域外であるため未調査である。なお、本遺構は自然流路（M9号溝状遺構）上に構築されている。

東列が2間（4.2m）であり、北南列が少なくとも2間以上と思われる。柱間は東列2.1m、北列2.0m、南列1.5mを測る。

ピットの掘り方は、円形を呈し、径50cm前後、深さ26~40cmである。

埋土は、ロームブロックを多量に含む黒褐色土である。P1・P3・P4で、径15cm程度の柱痕が確認されている。

遺物は、須恵器小破片1点と土師器小破片1点がピットの埋土から検出されている。



第208図 F17号掘立柱建物址実測図（1：80）



写真194 F17号掘立柱建物址

(15) F 8号掘立柱建物址

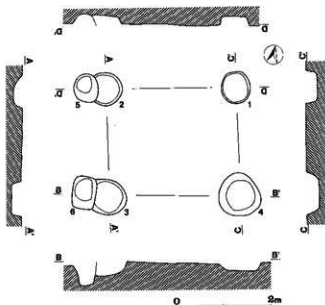
F 8号掘立柱建物址は、第Ⅰ区Lこ3グリッドにおいて検出された。H21号住居址の西壁を切って構築されている。

本址は、1間(2.8m)×1間(2.3m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。

P 1～P 4の掘り方は、長径70～94cmを測り、大形の円形を呈するが、深さは15～22cmと浅い。また、P 2・P 3の左脇にP 5・P 6が新たに掘り込まれている。

ピットの埋土は、基本的に黒褐色土とロームからなる。

ピットの埋土から、須恵器甕の破片2点と内面黒色処理が施されている奈良時代以降の土師器杯の破片2点が検出されている。



第209図 F 8号掘立柱建物址実測図(1:80)

(16) F 10号掘立柱建物址

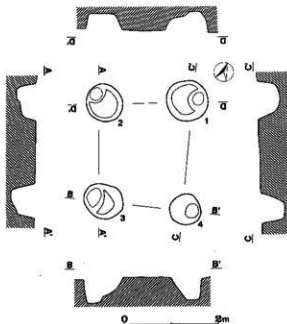
F 10号掘立柱建物址は、第Ⅰ区Lか3グリッドにおいて検出された。F 11号掘立柱建物址と重複関係にあるが、切り合い関係がないため、両者の前後関係は把握できなかった。

本址は、1間×1間(2.3m×2.2m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。主軸方向はN-17°-Wを指す。

ピットの掘り方は、円形を呈し、規模は長径65～90cmと大形であり、深さは40～48cmである。底面には柱痕部に相当すると考えられる掘り込みがあり、その位置は、東列では東側、西列では西側によっている。

ピットの埋土は基本的に黒色土である。

ピットの埋土から、土師器の小破片数点が検出されている。



第210図 F 10号掘立柱建物址実測図(1:80)

(17) F12号掘立柱建物址

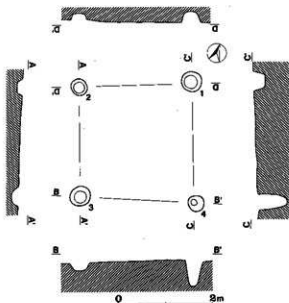
F12号掘立柱建物址は、第1区Lか4グリッドにおいて検出された。F11号・F13号掘立柱建物址と重複関係にあり、本址のピットが、F11号掘立柱建物址のピットを切っている。

本址は、1間×1間(2.4m×2.4m)の側柱式の柱配置をとる正方形を呈する掘立柱建物址である。主軸方向はN-17°-Wを指す。

ピットの掘り方は、円形を呈する。規模は、直径34~44cmと小形であり、深さはP1~P3が14~24cmで、P4のみが56cmと深い。

ピットの埋土は基本的に黒色土である。

本址からは、遺物は検出されていない。



第211図 F12号掘立柱建物址実測図(1:80)

(18) F18号掘立柱建物址

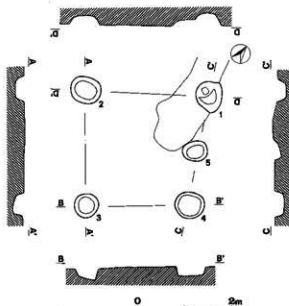
F18号掘立柱建物址は、第1区Gこ9グリッドにおいて検出された。M8号溝状遺構によって切られていたが、溝内においてもピットの掘り方が確認された。

本址は、北・南列1間(2.5m)、西列1間・東列2間(2.4m)の側柱式の柱配置をとる掘立柱建物址である。主軸方向はN-35°-Wを指す。

ピットの掘り方は、円形を呈し、規模は長径50~65cm、深さ20~26cmの範囲にある。

ピットの埋土は、基本的に黒色土とローム層である。

本址からは、遺物は検出されていない。



第212図 F18号掘立柱建物址実測図(1:80)

(19) F 19号掘立柱建物址

F19号掘立柱建物址は、第Ⅰ区Pあ・い9・10グリッドにおいて検出された。M4号溝状遺構によって、ビット掘り方の上部が一部破壊されている。

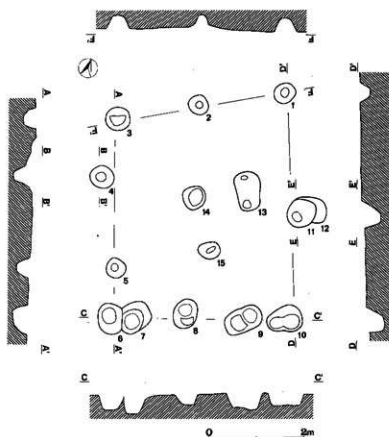
本址は、柱穴配置が不規則で、図示したビットすべてで構築されていたかどうか、という問題には検討の余地を残すが、北列2間(3.6m)、東列2間(4.8m)、西列3間(4.2m)、南列3間(3.8m)の掘立柱建物址として捉えておく。主軸方向はN-22°-Wを指す。

柱間は、北列間1.8m、東列間2.6m・2.2m、西列間1.0m~1.9m、南列間0.9m~1.6mを測る。

ビットの掘り方は、円形ないし楕円形で、P6とP7、P11とP12は切り合った関係にある。規模は、円形ビットが直径40~60cm、楕円形ビットが長径70~80cm程度で、深さは共に30cm前後が主体である。

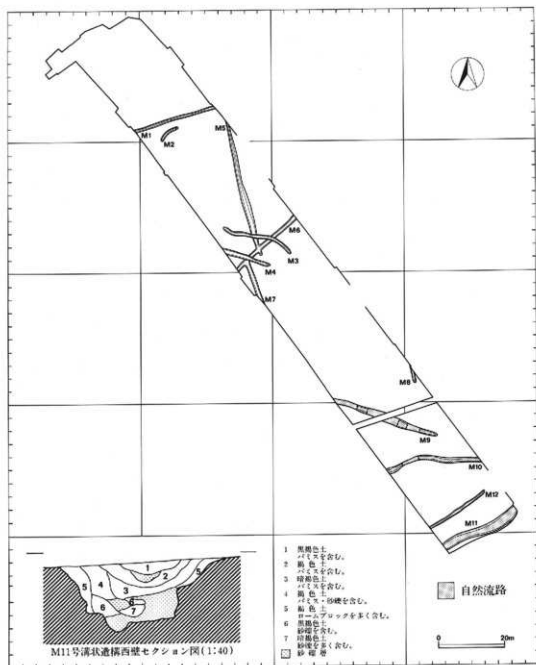
埋土は基本的に黒色土とローム層からなる。

本址からは、遺物は検出されていない。



第213図 F19号掘立柱建物址実測図(1:80)

V 溝状遺構



第214図 溝状遺構の分布

検出された溝状遺構は12基である。このうち、M12号溝状遺構は暗渠配水である。また、M1号からM8号溝状遺構までの8基は、溝相互の切り合いで前後関係があるもの、他の遺構に切られるものはない。切り合いからは少なくとも奈良時代以降のものである。検出された遺物は、縄文時代から平安時代までの遺物と近現代の遺物である。前者は、破壊した遺構の遺物、堆積時に流入した遺物と考えられ、後者が遺構の時期を決めるものであろう。したがって、大半は近現代の耕作等に関わる溝と思われる。しかし、聖原遺跡に続くM6号溝状遺構では、連結する溝状遺構に住居址を切るものがあることから、M5号～M7号溝状遺構の性格については、聖原遺跡の分析結果の後に改めて検討したい。

M9号～M11号溝状遺構は自然流路であり、M10号・M11号溝状遺構は「田切り」に切られている。M9号・M10号溝状遺構は、本集落形成以前に砂礫層を主体に埋設していた。一方、M11号溝状遺構では、砂礫層中から古墳時代から平安時代の遺物が多量に、しかも完形品の状態で検出された。このことは、M11号溝状遺構が集落形成時に機能していたことを示し、検出された遺物は、流入したものばかりではなく、意図的に廃棄されたものを含むと考えられる。

M1号溝状遺構 調査区北半部に位置し、調査区を横断する。H8号・H9号住居址を切る。調査区で確認された長さは26m、幅は80cm前後、深さは10～20cm。東西の高低差は、西側が低く60cm程度である。

M2号溝状遺構 H9号住居址南隅を切る位置にある。長さ13m、幅90cm、深さ5～10cmで、弧状を呈する。

M3号溝状遺構 H16号住居址南壁を切る位置にある。M5号・M6号溝状遺構も切っている。長さ23m、幅80～100cm、深さ12～30cmで、弧状を呈する。

M4号溝状遺構 F19号掘立柱建物址とM6号溝状遺構を切る。調査区で確認された長さは15m、幅は80～140cm、深さは10～25cm。南北の高低差は、南側が低く50cm程度である。

M5号溝状遺構 調査区北半部を縦断し、M6号溝状遺構と連結する。連結部の底部に砂礫層の堆積がみられた。調査区で確認された長さは40m、幅は100～280cm、深さは22～44cm。南北の高低差は、南側が低く20cm程度である。H14号・H16号住居址を切る。

M6号溝状遺構 調査区中央を横断し、聖原遺跡に続く。H17号住居址を切る。調査区で確認された長さは24m、幅は140～160cm、深さは38～60cm。東西の高低差は、西側が低く50cm程度である。

M7号溝状遺構 M6号溝状遺構と調査区西側で連結し、南下する。連結部の底部に砂礫層の堆積がみられた。調査区で確認された長さは14m、幅は136～160cm、深さは32～40cm。南北の高低差は、南側が低く30cm程度である。

M8号溝状遺構 F18号掘立柱建物址を切る位置にある。調査区で確認された長さは12.5m、幅は52～180cm、深さは10cm程度。

M9号溝状遺構 自然流路。H32号・H33号・H34号住居址、F17号掘立柱建物址、D2号土坑が、本址上に構築されている。調査区で確認された長さは34m、幅は100～250cm、深さは120cm程度。

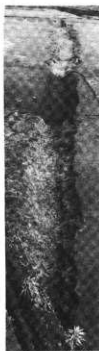
M10号溝状遺構 自然流路。H38号・H40号住居址が、本址上に構築されている。調査区を東西に蛇行する。調査区で確認された長さは30m、幅は250cm、深さは200cm程度。

M11号溝状遺構 自然流路。調査区南端に位置し、調査区で確認された長さは25m、幅は300cm、深さは80cm程度。遺物の検出状態は上記のとおり。

M12号溝状遺構 暗渠配水施設。特別な施設は付随していなかった。調査区で確認された長さは20m、幅は100cm、深さは50cm程度。



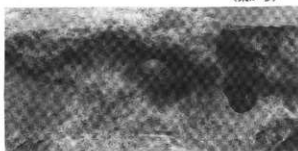
M1号溝状遺構（西から）



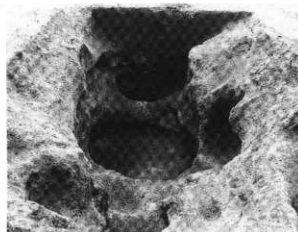
M5号溝状遺構
（東から）



M10号溝状遺構（東から）



M11号溝状遺構遺物出土状態

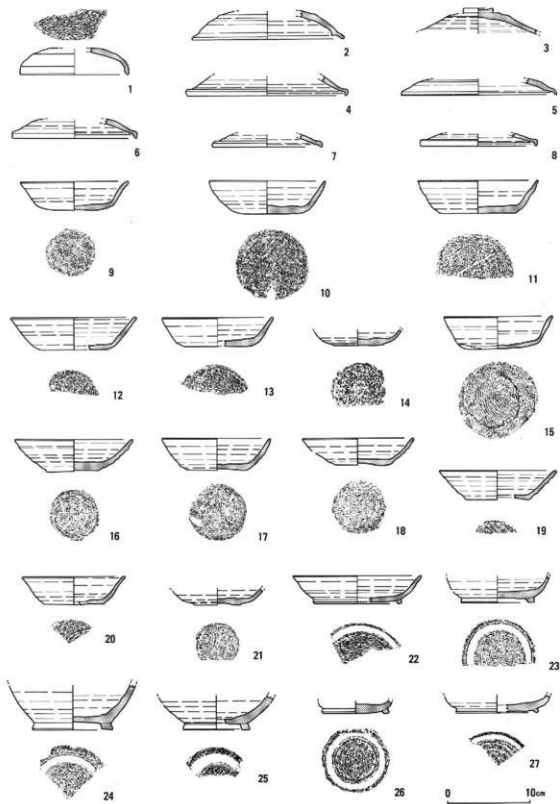


M9号溝状遺構（東から）

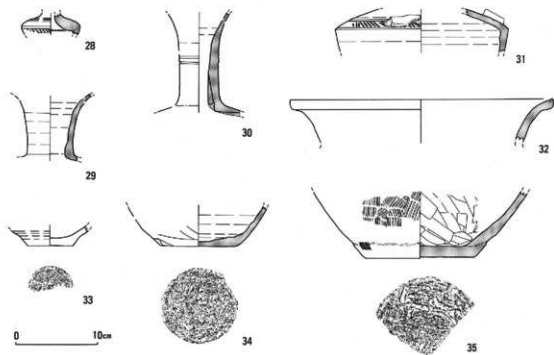


M11号溝状遺構（西から）

写真195 溝状遺構



第216图 M11号磚状遺構出土土器Ⅰ(1:4)



第217図 M11号溝状遺構出土土器Ⅱ（1：4）

表78 M11号溝状遺構出土土器観察表

器名 番号	種別	形状	数量	保存	形状	調査	色	出土位置	備考
1	灰志器	蓋	(13.2) — (3.2)	口縁1/4	□タロ	外面：天井部凹陥ヘラケズリ	内面： N3/0 外面： N3/0 断面： N4/0		
2	灰志器	蓋	(18.6) — (3.4)	口縁1/5	□タロ	外面：天井部凹陥ヘラケズリ	内面： 2.5Y6/2 外面： 5 Y6/1 断面： 2.5Y6/4		
3	灰志器	蓋	3.6 — (3.2)	つまみ 完整	□タロ	つまみ 外面：天井部凹陥ヘラケズリ	内面： N4/0 外面： N4/0 断面： N4/0		
4	灰志器	蓋	(19.0) — (2.4)	口縁1/16	□タロ		内面： 7.5Y5/1 内面： N5/0 断面： 7.5Y5/1		火焼あり
5	灰志器	蓋	(18.8) — (2.0)	口縁1/10	□タロ	外面：天井部凹陥ヘラケズリ	内面： N5/0 外面： N5/0 断面： 2.5YR5/2		
6	灰志器	蓋	(16.0) — (2.3)	口縁1/8	□タロ	外面：天井部凹陥ヘラケズリ	内面： 5 Y6/1 外面： 5 Y6/1 断面： 7.5Y6/1		
7	灰志器	蓋	(13.4) — (1.6)	口縁1/8	□タロ		内面： 5 Y6/1 外面： 5 Y5/1 断面： 10Y6/2		
8	灰志器	蓋	(14.0) — (1.5)	口縁1/8	□タロ		内面： N5/0 外面： N5/0 断面： N5/0		火焼あり
9	灰志器	杯	13.2 5.9 3.5	完整	□タロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部手持ちヘラケズリ	内面： 2.5Y5/1 外面： 2.5Y5/1		
10	灰志器	杯	14.1 7.5 4.1	口縁3/4 底部完整	□タロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部手持ちヘラケズリ	内面： 2.5Y7/1 外面： 2.5Y7/1 断面： N7/0		

11	須恵器	坏	(14.6) (9.0) 3.9	口縁1/5 底部1/2	□タロ	→底部切り離し(切り離し方不明) 外面: 底部手持ちヘラケズリ	内面: 2.5Y6/2 外面: 2.5Y6/2 断面: 2.5Y6/2		火葬あり
12	須恵器	坏	(15.2) 8.2 3.9	口縁~ 底部1/5	□タロ	→底部回転ヘラ切り 外面: 底部手持ちヘラケズリ	内面: 10Y5/1 外面: 10Y5/1 断面: 2.5Y6/2		
13	須恵器	坏	(13.6) (8.2) 3.5	口縁1/10 底部1/3	□タロ	→底部切り離し(切り離し方不明) 外面: 底部ナデ	内面: 10Y6/1 外面: 10Y6/1 断面: 2.5Y6/2		
14	須恵器	坏	— (6.0) (1.7)	底部3/4	□タロ	→底部回転ヘラ切り 外面: 底部手持ちヘラケズリ	内面: N4/0 内面: 7.5Y7/1 断面: 7.5Y7/1		
15	須恵器	坏	13.1 6.3 4.0	完形	□タロ	→底部回転ヘラ切り 外面: 底部回転手持ちヘラケズリ	内面: 7.5Y4/2 外面: 7.5Y4/1		
16	須恵器	坏	14.2 6.3 3.9	完形	□タロ	→底部回転未切り	内面: 7.5Y4/1 外面: 7.5Y4/1		
17	須恵器	坏	13.3 7.1 3.9	口縁2/3 底部完形	□タロ	→底部回転未切り	内面: 5Y6/1 外面: 5Y6/1 断面: N6/0		火葬あり
18	須恵器	坏	13.5 5.3 3.3	口縁1/2 底部完形	□タロ	→底部回転未切り	内面: 2.5Y5/1 外面: 2.5Y5/1 断面: 2.5Y5/1		火葬あり
19	須恵器	坏	(14.4) (7.4) 3.6	口縁~ 底部1/4	□タロ	→底部回転未切り	内面: 2.5Y5/2 外面: 2.5Y5/2 断面: 10YR6/4		火葬あり
20	須恵器	坏	(12.4) (7.2) 3.4	口縁~ 底部1/4	□タロ	→底部回転未切り	内面: 7.5Y1/1 外面: 7.5Y6/1 断面: 7.5Y6/1		火葬あり
21	須恵器	坏	(5.5) (2.0)	底部3/4	□タロ	→底部回転未切り	内面: N5/0 外面: N5/0 断面: N5/0		
22	須恵器	坏	(14.6) (10.2) 3.4	口縁1/3 底部1/3	□タロ	→底部切り離し(切り離し方不明) →高台貼付 外面: 底部回転ヘラケズリ	内面: 2.5Y7/2 外面: 2.5Y7/2 断面: 2.5Y7/2		
23	須恵器	坏	— 8.8 (3.3)	底部1/2	□タロ	→底部回転未切り →高台貼付	内面: 2.5Y5/2 外面: 2.5Y5/2 断面: 5Y4/1		
24	須恵器	壺	— (9.4) (5.5)	底部1/4	□タロ	→底部回転未切り →高台貼付	内面: N5/0 外面: N5/0 断面: 10YR5/1		
25	須恵器	壺	(8.2) (3.9)	底部1/3	□タロ	→底部回転未切り →高台貼付	内面: N6/0 外面: N5/0 断面: 5Y6/1		
26	須恵器	壺	8.4 (1.5)	底部完形	□タロ	→底部回転ヘラ切り →高台貼付	内面: 5Y7/1 外面: 5Y7/1 断面: 5Y7/1		
27	須恵器	壺	(9.8) (2.2)	底部1/4	□タロ	→底部回転未切り →高台貼付	内面: 10Y5/1 外面: 10Y4/1 断面: 10Y5/1		
28	須恵器	鉢	— (2.6)	肩部1/2	□タロ	外面: 肩部に列点文	内面: 7.5Y5/1 外面: 7.5Y5/1 断面: 7.5Y5/1		
29	須恵器	兵須恵	— (8.2)	頸部完形	□タロ		内面: 7.5Y4/1 外面: 10Y4/1 断面: 7.5Y5/4		
30	須恵器	兵須恵	— (12.2)	頸部1/2	□タロ		内面: 5Y6/1 外面: N4/0 断面: 2.5Y6/2		
31	須恵器	兵須恵	— (5.3)	肩部1/6	□タロ	外面: 肩部に列点文	内面: 7.5YR5/1 外面: N4/0 断面: 7.5YR5/2		
32	須恵器	甕	(32.0) — (5.2)	口縁1/7	□タロ		内面: 10YR7/4 外面: 10YR7/4 断面: 10YR7/4		
33	土師器	甕	(5.4) (2.5)	底部1/2	□タロ	→底部回転未切り	内面: 7.5YR3/3 外面: 7.5YR4/2 断面: 7.5YR3/3		
34	須恵器	甕	— 9.2 (5.0)	底部完形	□タロ	外面: ナデ、底部および外周手持ちヘラケズリ	内面: 5Y4/1 外面: 5Y4/2 断面: 5Y4/1		
35	須恵器	甕	(13.2) (8.2)	底部4/5	□タロ	内面: ナデ 外面: 叩き目	内面: 2.5Y5/2 外面: 2.5Y6/3 断面: 2.5Y6/3		

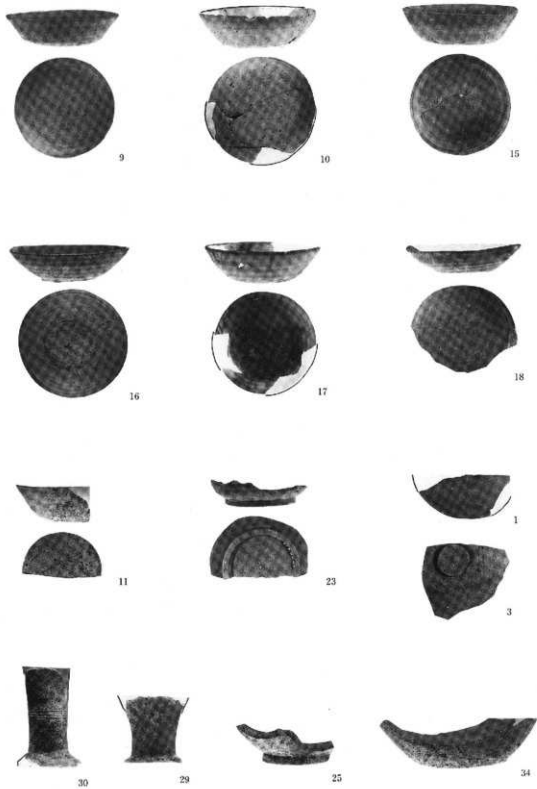


写真196 M11号磚状造柄出土遺物

佐久市埋蔵文化財調査報告書	第1集	『金井城跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第2集	『市内遺跡発掘調査報告書1990』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第3集	『石附窟址群Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第4集	『大ふけ遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第5集	『立科F遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第6集	『上曾根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第7集	『三貫畑遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第8集	『澁の下遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第9集	『国道141号線関係遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第10集	『聖原遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第11集	『赤塚埋外遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第12集	『若宮遺跡Ⅱ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第13集	『上高山遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第14集	『栗毛坂遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第15集	『野馬久保遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第16集	『石並遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第17集	『市内遺跡発掘調査報告書1991』(1月-3月)
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第18集	『西曾根遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第19集	『上芝宮遺跡』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第20集	『下聖端Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第21集	『金井城跡Ⅲ』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第22集	『市内遺跡発掘調査報告書1991』
佐久市埋蔵文化財調査報告書	第23集	『南上中原・南下中原遺跡』

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第24集

上聖端遺跡

長野県佐久市長土呂
上聖端遺跡発掘調査報告書

1993年3月31日

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385 長野県佐久市大字志賀5963

電話 (0267) 68-7321

印刷 株式会社 樺 <いちい>